



## 「長篠合戦図」(部分)

縦165.2cm × 横350.8cm

(財)犬山城白帝文庫 所蔵

天正3年(1575)、織田信長・徳川家康の連合軍が、武田勝頼の軍を破った長篠の戦い。六曲一隻の画面中央に、設楽が原における両者の激突が、右端には長篠城と鳶ヶ巣山砦の攻防が描かれます。写真は第四扇の部分図で、連吾川と柵の間の最前線で敵を迎え撃つ鉄砲隊のうち、やや後方まさかずにいる鉢巻姿の人物が成瀬正一まさなりで、初代犬山城主となった正成いえなりの父にあたります。

第11代将軍・徳川家齊いえなりの上覧に供せられたほか、他藩からの要請で貸し出され、模本が制作されたともいう名高き屏風です。

(特別展「城主の格式～国宝犬山城の至宝～」にて展示)

## 特別展

# 城主の格式 ～国宝犬山城の至宝～

2011.10.21(金)～11.27(日)

木曾川河畔に優美な姿を見せる、国宝：犬山城天守。ここは、江戸時代初めから明治維新まで、約250年間、9代にわたる成瀬氏の居城でした。成瀬氏は二条良基の子が三河国足助庄成瀬郷に住んだことから成瀬を姓としたと伝えます。初代城主の成瀬正成は徳川家康の側近として国政を支えると同時に、幼くして尾張藩主となった徳川義直（家康九男）の守役となります。元和2年（1616）に家康が没したのち犬山城主に任じられ、名実ともに尾張藩の付家老として藩政に当たることになりました。そののち9代正肥まで、尾張藩政を担い、幕府と尾張藩の関係安定を図る役割を果たしました。

財団法人犬山城白帝文庫は、成瀬氏から国宝犬山城と伝来の美術工芸品などの寄贈を受けて、平成16年4月に設立されました。その所蔵品は、刀剣・漆器・甲冑・絵画・書跡・古地図・古文書など、江戸時代を通じて犬山城主であった家にふさわしいものばかりです。本展はそのなかから約130件の至宝を7つのコーナーで展示し、近世の城主の格式の高さを実感していただくものです。

プロローグ 江戸時代最後の城主であった正肥が維新の動乱期に身につけた武器・武具をとおして、その勇姿をしのびます。

I) 成瀬氏の系譜 成瀬氏の系譜とともに、初代正成・2代正虎の遺品、犬山城および城下町の古地図を取り上げます。

II) 城主のよそおい 成瀬氏歴代の武器・武具の名品と、合戦図屏風の優品として知られ、

これまでほとんど貸し出されたことがない「長篠合戦図屏風」「小牧・長久手合戦図屏風」を展示します。

III) 城主の文芸 自ら絵筆をとった5代正泰・6代正典・8代正住が残した絵画とともに、和歌や古筆手鑑を御覧いただきます。

IV) 暮らしの道具 漆器を中心とした桃山時代から明治時代までの歴代藩主の調度品、茶道具などとあわせて、女性の道具を紹介し

V) 成瀬氏の交際 成瀬氏に宛てて送られた武将や文人の書状のなかから、政局を生々しく伝えるもの、尾張藩領であった岐阜町に関わりのあるものなどを展示します。

エピローグ 慶応4年（1868）の犬山藩誕生から、明治4年（1871）の廃藩置県まで、維新の激動期における成瀬氏のあゆみを伝える資料を取り上げます。



日の丸具足（小）

### 関連行事

#### ◆講演会

10月30日(日)14:00～16:00

「国宝犬山城と成瀬氏」

(財)犬山城白帝文庫主任学芸員 白水 正さん

#### ◆講座「犬山探訪」

11月6日(日)10:30～15:00

犬山城（案内:(財)犬山城白帝文庫理事長 成瀬淳子さん)見学、城下町見学

#### ◆ギャラリートーク

10月23日、11月13日・27日の日曜日  
各11:00～14:00～

(財)犬山城白帝文庫学芸員 寺岡希華さん  
当館学芸員

## 企画展

# ちょっと昔の道具たち

2011.12.13(火)～2012.3.4(日)

今年度で16回目を迎える展覧会。本展は小学校3年生が学ぶ社会科単元と連動し、「具体物を通して」学習する場を提供し、ハンズオンによる体験やジオラマ式の展示を取り入れ、「五感で楽しく」学ぶことを、当初から目的に据えています。さて、本年は新しい学習指導要領が全面的に実施されました。単元の目標は「地域の人々の生活について」「人々の生活の変化や人々の願い」を考えることを掲げ、具体的には博物館等での見学や道具の観察により、生活の今昔の違いや変化、過去の生活における人々の生活の知恵を考えることを例示しています。これに則り、当館では岐阜市小学校社会科研究会の先生方と毎年開催している博学連携会議において展示内容等の協議をし、より良い学習効果が得られるように検討を重ねました。

展示コーナーは児童の生活に関連した「学校」「まちかど」「家のなか」「家のまわり(遊びのコーナー)」の4コーナーを設けています。「学校」「家のなか」は、90～60年くらい前、「まちかど」「家のまわり」は、50～30年くらい前の時代設定とし、展示品をジオラマ式に陳列し、容易に当時の様子が理解できます。また、関連する各種体験資料も同じコーナーに配置しています。

本展におけるこのような展示手法は、観覧された皆様より大変ご好評をいただけてきました。しかしながら、個別の道具の変遷を調べるには、各コーナーに関連する道具が散在しており、わかりにくいという欠点が従来からありました。そこで、別に「道具のうつりかわり」コーナーを設置

し、「水をくむ道具」など14のテーマを設けて資料を紹介しています。

さらに、本年は新たに



昭和30年代のクリスマスツリーが飾られた「まちかど写真館」コーナー

道具の変遷を追うことができる新ワークシートを作成いたします。

また、従来から会場内ではボランティアの「ものしり博士」が常駐し、解説や体験活動の補助をおこない、毎年ご好評をいただいています。道具の移り変わりとともに、生活の変化、願い、知恵などについて、ボランティアそれぞれの体験に基づくお話しを聞くこともできますでしょう。

平日は学校団体利用が多い本展ですが、土曜、日曜、祝祭日には、恒例となった「新春独楽まわし」「和みの倶会」をはじめ、「おもちゃ作り教室」「ものしり博士のわくわくワークショップ」、「糸つむぎ&綿くり体験」、メンコ・お手玉・ペーゴマの各大会など各種イベントを開催し、ご家族でお楽しみいただけます。「ちょっと昔」で、是非冬の一日をお過ごしください。



窓をのぞくと養蚕の道具と初午の飾りが並ぶ「家のなか」コーナー

## 関連行事

### ◆一般来館者向け

- 新春独楽回し 1月9日(月祝) 11:00・13:00・15:00
- 和みの倶会 1月9日(月祝) 10:00・14:00・16:00
- おもちゃづくり教室(各日11:00～, 14:00～)  
「うぐいす笛」[200円] 1月8日(日)・親子でチャレンジ  
「さるぼぼ」[800円] 1月15日(日)・「鬼のからくり人形」  
[400円] 1月22日(日)・「都どり」[500円] 2月5日(日)・親子でチャレンジ「布で作る飾り梅」[800円] 2月19日(日)・「まゆびな」[400円] 2月26日(日)  
※[ ]内は材料費、定員各回先着20名(「さるぼぼ」「布で作る飾り梅」は各回10名)、開始30分前より整理券を配布します。
- ものしり博士のわくわくワークショップ(各日10:00～12:00, 13:00～15:00) 1月7日・14日・21日・28日、2月4日・11日・18日・25日、3月3日の各土曜日
- 糸つむぎ&綿くり体験(各日13:00～16:00) 2月4日・11日・18日・25日の各土曜日
- みんなあつまれ!お手玉大会 1月29日(日) 13:30～
- みんなあつまれ!メンコ大会 2月12日(日) 13:30～
- みんなあつまれ!ペーゴマ大会 3月4日(日) 13:30～

### ◆学校団体向け

- 学校利用説明会(小学校教諭対象) 1月5日(木) 14:00～、1月6日(金) 10:00～14:00～
- たぬきの糸車 SPECIAL DAYS  
2月21日(火)・22日(水)・23日(木)・24日(金)  
※都合により内容・時間等が変更になる場合があります  
※学校団体見学の申し込みは、随時受け付けております。  
ご希望の見学日時が満員となる場合もありますので、お早めに博物館までご相談ください。

## 加藤栄三・東一記念美術館

### ～日本画家への旅立ち～ 若き日の栄三・東一

2012. 1. 11(水)～ 4. 22(日)

栄三・東一は岐阜市美殿町で漆器商を営む商家に生まれました。栄三は大阪船場の出店を手伝っていましたが商いが肌に合わず心中煩悶する日々を送っていました。ある日、大阪三越で開催された淡交会で竹内栖鳳の「斑猫（まだらねこ）」を見て感銘を受け日本画家になろうと決意します。父親の強い反対がありましたが、母親の良き理解を得て、書家であった叔父：山田力二を頼って上京します。

東京美術学校（現東京芸大）を受験しますが失敗。翌年の入学を期して小石川にあった川端画学校で実技を中心に学びます。その結果、合格を果たします。一年入学が遅れたことが栄三にとって素晴らしい同級生と巡り合うという皮肉な結果となりました。生涯の良き友でありライバルとなった東山魁夷・橋本明治・山田申吾とともに学ぶことになったのです。



「夏休み」栄三

当時の美術学校では、四年生になると公募展への出品が許され、第10回帝展に東山魁夷と共に初入選を果たします。卒業後は結城素明に師事し、芸術的な苦悩に直面しながらも順調に日本画家として歩み始め、30歳で新しく設けられた文展文部大臣賞を受賞します。

しかし、昭和20年7月9日の岐阜大空襲で生家が全焼し、それまで書きためた作品・写生をほとんど焼失します。

本展では、「山の郵便局」「秋」などの戦前の作品とともに昭和20～30年代の作品を中心に展示します。



「海のみえる丘」東一

栄三と10歳違いの弟：東一は、旧制中学卒業後、画家を志しましたが父に許されず、大阪船場の店を手伝うことを余儀なくされました。その後、画家への思いが断ち切れず家出同然で兄：栄三を頼って上京します。東一25歳という遅い決断でした。

美術学校卒業後、山口蓬春に師事するとともに、高山辰雄・浦田正夫らを中心とする日本画研究団体：一采社に参加します。一采社は昭和36年、第20回展を最後に解散しますが、この研究グループから戦後の日本画壇をリードする多くの逸材が育ちました。東一も、このグループで多くの画友に巡り合うとともに研鑽を重ねます。「草原」（36歳）、「砂丘」（39歳）で2回の特選を受賞、45歳で日展初審査員となり日展のホープとして活躍を続けます。

56歳のとき、兄：栄三の突然の死に接し、これまでの風景画を中心とした作品から、人物をモチーフにした重厚で哲学的な作品を多く描くようになりました。

本展では、兄：栄三の悲報に接するまでの作品を中心に展示します。

美の追求という終着駅のない旅に出発した若き日の栄三・東一の作品から、二人の新しい魅力を再発見してください。

## 特別展『国宝薬師寺展』終幕

10月2日(日)、特別展『国宝薬師寺展』が好評のうちに終幕をむかえました。加藤栄三・東一記念美術館で同時開催された『薬師寺所蔵名品展』の入館者をあわせると10万人にあと一步の来館者をお迎えすることができました。

主催者として加わっていただいた薬師寺の全面的なバックアップのもとに、薬師寺が所蔵する日本美術史上の名品を惜しげもなくご出品いただいただけでなく、毎日開催された薬師寺僧侶による展示ガイダンスは「ユーモアがあり、わかりやすい」という評判で、当初1日3回の予定がやがて毎時になり、終盤には3人の僧侶に常駐していただいて30分おきに開催するほどでした。

リピーターが多かったのも本展の特徴で、僧侶と顔なじみになったり、薬師寺の〇〇さんはいつ岐阜にお見えになるのか、といった問い合わせも数多くありました。

図録は2度増刷しても、最終日早々に完売。異例尽しの展覧会でした。

博物館職員にとっても、「どのように来館者をもてなすか」ということについて、薬師寺スタッフから多くを学ばせていただいた2カ月でした。

## 歴博セレクション

### 錦絵となった武将たち (仮称)

2012.3.16(金)～4.8(日)

博物館では、戦国時代をイメージする資料として、江戸～明治時代の錦絵のうち戦国武将をテーマにした「武者絵」と呼ばれる作品を収集しています。これらは史実に基づく図ばかりではなく、歌舞伎などの演目として創作が加えられたものや、軍記物・読本に基づく図のほうが多いといえますが、人々が抱くヒーローのイメージを具体化したものといえるでしょう。また、郷土玩具や、端午の節句飾りにも「武将の強さにあやかりたい」との願いから古今のヒーローが題材となっていることが、しばしばあります。

本展では、博物館が所蔵する庶民のヒーローを題材とした絵画・民俗資料を選びすぐって紹介します。



「太平記英勇伝 菜藤右兵衛 大夫勝興」 歌川国芳画

#### ■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌4ページで紹介した以外の分館展覧会は、以下のとおり開催します。

- 10月4日(火)～1月9日(月・祝) 「加藤栄三・東一 風景との出逢い」
- 10月4日(火)～11月23日(水・祝) 「伊藤彭耳と“はっ・とび”の仲間たち」
- 11月25日(金)～1月9日(月・祝) 「岐阜二紀グループ展」
- 1月11日(水)～2月26日(日) 「ふるさと岐阜の芸術家たち」
- 2月28日(火)～4月22日(日) 「山田裕彦 洋画展」

#### ■特集展示(2階 総合展示室内)■

2階の総合展示室内の一角に特集展示コーナーを設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを分けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

- 10月21日(金)～11月27日(日) 「城主の格式展第2会場」
- 12月2日(金)～2月5日(日) 「世界にはばたいた西浦焼の世界」
- 2月10日(金)～3月18日(日) 「塩谷鶴平」
- 3月23日(金)～ 「縄文・弥生時代のくらし」

#### ■柳津歴史民俗資料室の展示■

- 10月12日(水)～11月13日(日) 「柳津の人物」
- 11月15日(火)～12月18日(日) 「岐阜市の古墳」
- 12月20日(火)～1月29日(日) 「博物館の龍大集合！」
- 1月31日(火)～3月11日(日) 「雛祭り」
- 3月13日(火)～4月15日(日) 「古文書にみる結婚と離婚」

## 研究ノート

### 六合庵久田宗全 —「長良宗全」と呼ばれた茶人—

稲川由利子

はじめに

かつて、江戸時代終わりから明治時代にかけて、真福寺村（現・岐阜市長良）で庄屋役を務める富農であり銀行などの創業にも関わった大野木訥庵茂作（1830～1899）が、茶道にも熱心で、さまざまな茶人ゆかりの道具を用いた茶会をしていたことを紹介した（註1）。しかし、その師であった六合庵久田宗全については「岐陽雅人伝」（註2）、「茶人系譜」（註3）などに記載されているものの内容に齟齬があり、どこで、誰に茶道を学んだ、どのような人物か確かな情報がなかった。

今回は、今年2月に当館の総合展示室で実施した特集展示「幕末岐阜の茶人 大野木訥庵コレクション」及び土曜講座に際して行った調査を踏まえ、宗全について検証を進めたい。

#### 1) 既刊資料の検証

まず始めに、六合庵久田宗全がどのような人物と紹介されてきたのか整理したい。「岐陽雅人伝」の記述を引用すると、「久田宗全は岐阜市長良の人、安藤三右衛門の次男に生る。（中略）長じて茶道の宗家久田耕甫の養子となり、久田流を継承して宗全と称す。流派大に恢興す。後隠居して栄甫と称す。別に六合庵の号あり。（中略）晩年故山に帰臥し、自適悠々たり。爾後世人呼んで長良宗全と云う。種々なる遺品、頗る雅致に富み、数寄者に愛玩せらる。元治元年（1864）七月四日没す。墓は市内矢島町日蓮宗法華寺内墓所にありて、法名は六合庵久田宗全日恵居、碑は室の建つる処、碑陰に記せるは元治甲子七月四日久田宗全妻建立禅霊幾久若。（後略）」とある。

現代の茶道界において「久田」を名乗る家として著名なのは、表千家家元を代々支える高倉町久田家と「久田流」を名乗る両替町久田家の

2家であろう。そのうち、久田流（両替町久田家）8世春斎耕甫の後継者であった、とされているのだが、現在では耕甫の後継者は慶三とされており、六合庵を名乗る人物は登場しない。さらに、法華寺に残る墓碑は無縁墓と扱われており、子孫や流派による供養は行われていない状況である。風化しているものの墓碑の建立者名は「榊原幾久若」と読め、妻がいたかどうかも定かではない。父・安藤三右衛門がどのような人物であったのかも不明である。

次に、「茶人系譜」には「久田栄甫の弟で現在岐阜市長良で久田流を教え長良久田といわれる」とされている。その師・林宗栄は「名古屋の医師 宗参と故あって義絶 医業のかたわら茶に親しみ 有栖川宮家に仕えその仰せにより久田を称するに至った 嘉永二年（1849）十一月三日没 六九」とされ、兄・栄甫は「尾張で久田流を広める 明治十六年（1883）没 六六」とされている。本書の初版が出版された昭和15年に宗全が活着しているような記述であり、元治元年に亡くなったという墓碑の内容と矛盾するうえ、嘉永2年に亡くなった師匠から学んだとするには、年齢に無理があるようにも思われる。一般に宗栄の没年は嘉永3年とされており、それとも矛盾している。確かな情報がない人物でありながら、いかに「長良久田」あるいは「長良宗全」の呼称が広まっていたのかかわれる。

#### 2) 木訥庵コレクションからの検証

大野木訥庵コレクションには茶道具のみならず免状や点前・道具の覚書も含まれており、宗全自ら書いたと思われる木訥庵の免状と、「久田家」と題した流儀の系譜（以下「系譜」と称する）を示したものがある。「系譜」によると、宗全は生々斎林宗栄に茶道を学んだ。幼名を敬次郎といい、有栖川宮韶仁親王につかえた。諱は脩、子琢、号は活々斎、六合庵、通仙居、蓬萊山人、雷車、緑陰などがある。

その師である宗栄は、久田関斎宗参の養子となり有栖川宮韶仁親王につかえて法橋を名乗る事を許された。諱を堅、字を栄甫、号は生々斎、茗燕庵、長川子などがあり、天恵翁ともいう。

忌日は嘉永三年十一月三日六九歳とされている。さらに、宗栄の弟子として宗全のほか栄甫という人物が記されており、こちらは幼名を元三郎、のち主税と称し、諱を弘、字は子道、無々庵、水明などの号がある。

以上から、栄甫を名乗る人物が2人おり、「岐陽雅人伝」にあるように宗全が隠居後栄甫を名乗ったのではなく、別人であることが明らかである。ただ、「系譜」には生年など年齢が分かる記述はなく、宗全と宗栄に師弟以上の関係があったのか、また宗全と栄甫のどちらが年長で、兄弟などの関係にあったのかは明確でない。しかし、安政5年(1858)の茂作宛免状の流派に関する記述に「(前略)生々斎宗栄ニ傳之

于其二子予并弟榮甫及今云」とあることで、栄甫は宗全の兄ではなく弟であることがわかる。さらに、「大高町誌」(註4)には名古屋や知多地方で久田流が隆盛を誇っているのは、栄甫が地方を遍歴し茶道の指導に尽くした成果である、とされているが、木訥庵コレクションの中には年次不詳ながら栄甫の画賛や茂作に送った書簡が見られることから、茂作は栄甫とも直接交流していたことが伺える。宗全没後、栄甫が長良に来て茶道を教授した可能性も考えられ、それによって両者が混同して「長良宗全」と伝えられることになったのではないだろうか。ちなみに、茂作の子・鍔二も久田清好に茶の湯を学んで木訥庵を名乗った。清好が明治34年に鍔二宛に発給した免状に伴う流派の記述には、「予父宗栄而今及子云」とあり、宗栄には少なくとも3人の子があったことになる。

なお、宗全は「系譜」に、宗栄と同様に宗参の弟子であった耕甫について「両替町後見を称して法嗣を破道す」と批判を含めた表現で記している。このことから、宗栄と耕甫が有栖川宮家の仲介で和解した、とされていることには疑問がもたれるし、宗全が耕甫の養子になったというのも信じがたい。

### 3) 宗全の最期

免状・系譜では不明なのが、宗全はどこに住居していて、なぜ法華寺に葬られたのか、という点である。宗全が安政5年3月中旬から4月

下旬にかけて行ったという茶会の会記にも、どこで催したのかは、明示されていない。そこで、木訥庵の茶会記にしばしば名を連ねており、長良の商家であり庄屋も勤めた川出家之右衛門の御子孫に、宗全に関する資料の有無を尋ねたところ、「祖母から『宗全は当家で亡くなった』と聞いている」との情報を頂き、「西京茶宗匠当家ニ於テ死ス。安藤山三郎従弟、市内矢島町法華寺ニ葬ス」と記された過去帖をお示しいただいた。安藤山三郎は元禄期(1688~1703)から続いた鶴匠の名であるが、明治期の記録ではその名は見られなくなる。川出家の過去帖には、宗全のほかにも山三郎の父や兄の忌日が記されており、安藤家と川出家が親類関係にあった可能性を窺わせる。また、文政期に法華寺で供養された山三郎がいたことから、安藤家は法華寺檀家であった可能性も高い。

ただ、茂作と宗全や栄甫の書簡には時期不明ながら、二人が茂作の家に近い長良に常住していたとは考えにくい表現もある。現段階では亡くなった時の年齢なども不明だが、宗全は主に京に居住していて稽古のために長良を訪れた際には親類宅である川出家に身を寄せ、滞在していた川出家で客死して実家ゆかりの法華寺に葬られたのではないだろうか。

文末になりましたが、墓碑調査をお許しいただいた法華寺様をはじめ、資料を御提供いただきました川出孝治様、鈴木康之様に篤く御礼申し上げます。また、「木訥庵コレクション」という貴重な資料群を当館に御寄贈くださいました大野家の皆様にあらためて感謝申し上げます。

註1 拙稿「幕末期岐阜の茶の湯 -大野木訥庵の茶会記から-」博物館だより No.55 2003

註2 野田勘右衛門著「久田宗全」『岐陽雅人伝』西濃印刷株式会社 1935

註3 末宗廣著「久田系」『茶人系譜』河原書房 1940初編

註4 『大高町誌 第六 風俗・民情』「四 郷土の育んだ人々 下村実栗」大高町誌編纂委員会 1965

